



史跡白老仙台藩陣屋跡 発掘調査へ

～東側土塁の切れ目にあった「東御門」とは～

町教委・元陣屋資料館（武永真館長）は、6月から7月にかけて史跡発掘調査を実施します。絵図面に残るが、現状は土の変化だけを残して何もない土塁にあったとされる「東御門」を調査します。

同史跡の保存管理や活用、整備、運営体制を位置付けた同史跡保存活用計画（令和3年度から10年間）に基づき実施します。

同資料館学芸員の平野敦史さんは「東御門は門を出ると愛宕山に通じるこのエリアで意味深い施設。できれば門の復元までいけるとうれいですね」と、30年ぶりとも言える発掘調査の成果に期待しています。「計画ののっとなって年次的な検証、証明、整備を図り、土塁の明確な全体像をうかがうことができれば」と話していました。

7月9日には発掘調査の見学会を実施します。詳細はP17に。

左絵図は安政4（1857）年に行われた箱館奉行視察の説明用に描かれたとされる「仙台藩白老陣屋之図」の一部。点線丸が「東御門」



仙台藩白老元陣屋資料館が発行

これ一冊で白老博士

「ふるさと再発見シリーズ 総集編」

白老のアイヌ伝承をまとめたシリーズ6

「アイヌ民族と和人の関わり」



再発見シリーズは町民にあらためて本町の特徴や魅力を再認識してもらうとともに、町外から訪れた方にも一層深い理解をひと、平成28（2016）年度から発行しています。

総集編は第1号の「しらおい再発見 地域学講座」から、「白老人物伝1」「ポロト湖物語」「アヨロの大地」、第5号の「白老元陣屋を描いた絵図面」までを一冊にまとめました。いずれも平易な文章で簡潔に書かれ、「本町が誇る多種多様な歴史的資源」を網羅しています。B5判72頁、カラーで2000冊発行。

シリーズ6「白老のアイヌ伝承 - アイヌ民族と和人の関わり」は、満岡伸一や松木覚の著に拠り、白老アイヌの開祖から仙台陣屋、白老会所に関わる伝承をまとめています。B5判13頁で1600冊発行。同資料館、町内公共施設などで配布しています。問い合わせは同館（☎85-2666）。

知っておこう アイヌ文化

チシマザサ

イランカラブテ。5月から6月は、タケノコ採りの季節です。

この時期にタケノコと言えば、チシマザサ（ネマガリダケ）のササノコを意味し、匂の味覚を味わおうと、多くの人が山へタケノコ採りに出かける一方で、遭難や事故には十分、注意する必要があります。

さて、アイヌ文化でも、アクが少なく、茹でるだけで料理に使えるチシマザサのササノコは、食用として利用されていましたが、さらに、数年に一度しか実をつけないというササの実も混ぜご飯や粥に利用したり、粉にして団子にしました。

チシマザサの利用は食用だけに留まりません。アイヌ語でチシマザサの茎のことを、オプネトプ（矢柄になる竹）やルムネトプ（矢尻になる竹）などと呼び、軽く硬い茎を矢柄にしたり、鋭く尖らせて矢尻に利用しました。また、現在では主に孟宗竹が使用されるアイヌ民族の楽器、ムックリ（口琴）も、その材料としてチシマザサの茎が利用されていました。他にも、伝統儀式イヨマンテ（クマの霊送り）で、子熊を檻から出して遊ばせるためのタクサイナウ（清めのイナウ）や式場の中央に子熊をつなぐ、ヤシケオックニと呼ばれる棒にも、チシマザサの葉を利用しました。このように、チシマザサは、ササノコ、実、茎、葉といったそれぞれの部位がアイヌ民族の暮らしのあらゆるシーンで活用されていることが分かります。



チシマザサの葉で屋根を葺いたクチャ（仮小屋）

政策推進課 アイヌ政策推進室 学芸員 森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301